



特集

屯田兵 150年のレガシー

150年前の1875年(明治8)、最初の屯田兵が札幌郡琴似村^{とんでんへい}に入地したのを皮切りに、
7,337人の屯田兵が家族と共に北海道に移住し、37カ所の兵村^{へいそん}を開いた。
その東端にあたる太田兵村^{おおた}(厚岸町^{あつげし})、和田兵村^{わだ}(根室市^{ねむろ})を訪ねるとともに、
北海道屯田倶楽部^{クラブ}の活動成果から、屯田兵が残した遺産、レガシーをたどってみよう。

1875年の琴似兵村
から1899年の士別
兵村・剣淵兵村まで、
37カ所に設置された
屯田兵村。提供＝北
海道屯田倶楽部



札幌から釧路^{くしろ}へ向かう特急「おぞら」が太平洋に出会うと、あつという間に車窓が海霧に閉ざされた。時折、波打ち際だけがキラツと光る。乳白色のもやの中を列車は海に沿って疾走し、釧路に到着。花咲線^{はなさきせん}の普通列車に乗り換えて、めざすは厚岸だ。厚岸駅から五キロほど内陸の太田地区が、石川、山形、福井、新潟など八県から四百四十戸の士族が屯田兵に入った場所である。一八九〇年(明治二十三)のことだった。

太田兵村の記憶

(写真上) 明治20年代末に撮影された釧路国厚岸郡太田屯田兵村の一家族。「百信千報に如一写」(「百聞は一見に如かず」の意味)の文字は撮影用に出したものと考えられている。当時は珍しいガラス戸も写っている。
北海道大学附属図書館所蔵

文＝北室 かず子
写真＝田淵立幸



屯田兵屋の配置が「戸ごとに記された図を説明してくれ
た小田島さん。太田」の通り、二の通りなどの地名も残る。

屯田兵制度の目的はロシアに対
する国防、開拓事業の推進、失業
士族の救済、道内の治安維持にあ
った。「兵農一如」を掲げ、現役の
間は軍事訓練を主とし、家族が農
作業を支えた。現役を終えても後
備役、予備役として有事には戦場
に動員された。厚岸町海事記念館
学芸員の小田島賢さんは「平時は
農民と言っても、厚岸や根室の夏
はこちらの言葉でジリという霧雨
が続いて日照が足りず、農作物の

生育には厳しい気象条件です。太
田兵村と根室の和田兵村は、室蘭
の輪西兵村とともに太平洋岸の警
備が主目的だったのです」と語る。

太田、和屯田兵の現役期間は
三年から五年。行軍や射撃訓練
を行いつつ、鬱蒼と茂る大木を切り
倒して耕地を拓いていく。土地、家、
農具などのほか、三年間に限り米
も支給されたが、四年目以降は自
分で作物を育てて食べていかねば
ならない。太田兵村や和田兵村で
は極めて困難で離村者が続出した。

釧路叢書「古文書に見る近代の
釧路地方」(高嶋弘志著)によると、
開村五年を経過して開墾率が四割
に満たないのは太田兵村と和田兵
村のみ。一戸あたりの農産物収入
額も、最高の新琴似兵村(現・札
幌市北区)に対して二割五分から
四割。逃亡や失踪で給与地没収処
分を受けた数は和田兵村、太田兵
村が筆頭だった。東を守る二兵村は、
圧倒的に不利な条件の中で屯田開
拓の失敗例とされたのである。

屯田兵の応募は当初、士族に限
られ、後に平民にも広げられた。
太田兵村は最後の士族屯田である。

士族で農作業の経験がないことも
苦勞の要因だった。成功したのは
軍馬の生産で、現在の酪農につな
がっている。

太田兵村は地元の誘致によって
生まれた。明治十年代、鯨漁の不
漁で低迷した経済を盛り返そうと、
有力者らが屯田兵の誘致活動を行
い、奥別寒辺牛付近を候補地とし
た。この選定に反対したのが太田
紋助だった。紋助の父は和人で母
はアイヌとされる。父を早くに亡
くした紋助は、八歳から国泰寺の
寺男として働きながら住職に読み
書き、算盤、農業を学ぶ。長じて

厚岸アイヌの総代となり、アイヌ
のための共同開墾地を設けたり、



国泰寺の境内地(写真上)や道有林を含む約13万㎡が史
跡「国泰寺跡」に指定され、隣接する厚岸町郷土館には歴
代住職などが著した寺務日誌『日鑑記』のマイクロコピーなど
の資料が展示されている。●国泰寺／厚岸町湾月1丁目5。
厚岸町郷土館 ☎0153-52-3794

漁場経営や渡し船の事業を展開し
た。地質や気象を熟知する紋助が
兵村の適地として薦めたのが、現
在の太田の地だった。民間人の名
が兵村名になったのは三十七兵村
のうち太田のみである。

それにしても明治十年代という
早い時点で地元有志が経済振興に
動いたとは驚きだ。厚岸は幕府に
よって蝦夷三官寺の国泰寺が置か
れたことからわかるように、江
戸時代から千島列島に至る重要

山形県出身の屯田兵の家族が描いた回想録「西野家
行囊(こうのう)帳」には故郷の出身から兵村での重務
などが記録されている。太田屯田開拓記念館内に展示。
厚岸町有形文化財。



(※) 時期・兵村によって現役期間は異なる。琴似、山鼻などの屯田兵は当初、無期限の永世屯田兵とされた。



1

拠点だった。近藤重蔵、伊能忠敬、高田屋嘉兵衛、松浦武四郎など、巨星たちの足跡が、厚岸には交錯している。

太田屯田開拓記念館には屯田兵の遺品が展示されている。身体的特徴や行軍記録が書かれた屯田兵手帳や、士族屯田らしさを物語る刀や鎧などで、「持ち主の顔立ちさえも見えてくる気がするんですよ」と小田島さんは言う。屯田兵は日露戦争に出征し、二〇三高地の激戦で多くの戦死者が出た。館内には日露戦争従軍の資料もある。開墾の苦勞に耐え、ようやく息をついたところでの出征、戦死。どれほど無念だっただろう。太田地区に復原された屯田兵の兵屋を見ると、屯田兵の人生がより深く心に染み入った。



2

1 太田屯田開拓記念館では士族が故郷から持ち込んだ家宝も展示。上杉謙信に仕えた城持大名の本庄繁長と柿崎景家の子孫も太田屯田の一員だった。2 釧路集治監の囚人によって建てられた兵屋。復原され、当時と同じ位置に建つ。向かい合う建物の、道路をはさんで対称になる「裏返し型」と呼ばれる建て方も希少だ。北海道有形文化財。厚岸町太田2の通り6-3。3 扶助米や塩菜料の支給記録も書き込まれた松本米吉の屯田兵手帳。



3



4



5



6

4 土間、6畳と4畳半の座敷、板の間、台所、押し入れ、便所からなり、屯田兵の暮らしが実感できる。5 入地の際、太田屯田第3中隊長の岩淵繁隆が故郷の風物で隊員を慰めたいと出身地の青森から種を取り寄せて植えたアカマツ。6 約150mにわたって延びる樹齢150年(推測)のヤマクワ並木。自生のヤマクワを移植し、養蚕に取り組んだ。養蚕は不振に終わったが並木は防風林として残され、5と共に「太田屯田の桑並木」として厚岸町の天然記念物に指定されている。

和田兵村の遺産

花咲線で根室半島をさらに東進し、根室の一つ手前の西和田駅で降りると、そこには和田屯田兵が切り開いた緑野が広がっている。一八八六年(明治十九)から一八八九年(明治二十二)までの間に新潟、福井、石川、福岡などから士族四百四十戸が入地した。

西和田駅から海霧がたちこめる道を五分ほど歩くと、三十七兵村の中でただ一つ残された屯田兵の被服庫が現れる。米国西部開拓時代の構造様式であるバルーン・フレイム(風船構造)の建築で、一八八五年(明治十八)に建てられた。和田屯田歴史保存会の会長・中村英夫さんはこう語る。「開村百周年の事業として遺品の寄贈を呼びかけ、被服庫に和田屯田記念館を開きました。士族ですから兜や陣笠を故郷から持ってきています。農作業は経験したことがなかったわけですから、たいへんだったと思います」。保存会は屯田

兵子孫の二十七人。驚くべきことに今なお同じ場所で酪農を営む方が十四人もおられるそうだ。

被服庫は屯田兵廃止後、和屯小学校の体育館となった。学校移転などに伴い二度も曳家^{ひきや}で移され現在に至る。保存会事務局長の市橋^{ひしは}久さんは和屯小学校の卒業生。「地域の者が材料を持ち寄って支柱を

和屯屯田歴史保存会のみなさん。左から、中村さん、市橋さん、鹿毛さん。会の活動は北海道文化財保護功労者表彰を受けている。



つけて倒壊を防いできました。小学校の体育館になったからこそ、残っているのだと思います」。会員の鹿毛^{かへ}淳^{しん}さんも同校卒業生で「体育館だった時は、二階に運動会の綱引きの綱や玉入れの籠などがぎっしり詰め込まれていました。階段はなくてロープとかで上げていたように思います」と、懐かしむ。学校行事はもちろん、映画会など村の行事もすべてここで行われてきた。地域の心の依り代^{よりしろ}なのだ。

今年、被服庫の修理工事が行われることとなった。「長年、要望し



(左)和屯兵村の精巧なジオラマをはじめ屯田兵子孫からの寄贈品が展示されている館内。柱は本来なかったが、老朽化し補強のために入れている。(右)梁や柱の数が少なくすみ、広い空間を確保できるバレーン・フレーム建築がよくわかる2階。札幌時計台、札幌農学校第2農場の建物群と同じ構造である。規格化された材料と工法により熟練度の低い者でも建てられ開拓期に重用された。●和屯屯田兵村の被服庫(和屯屯田記念館)／根室市西和田568-2。改修工事のため閉館中。

てついに保存修理をしていただけることになり、本当にありがたい」と、中村さんは安堵^{あんど}の表情を浮かべる。しばらくの間、見学できないのは残念だが、かけがえのない歴史文化のシンボルが守られることを喜ぶたい。

和屯兵村の名の由来は屯田兵第二大隊長の和田正苗^{まさなえ}。根室管内から北千島の占守島^{しむしゅ}までを統括する郡長でもあり、鯨漁の不振と西南戦争後のデフレにあえぐ根室の窮状を訴え、救済に動いた。和屯と並んで記念館に顔写真が掲げられている人物が、松浦忠順^{まつうらただしん}だ。一八四九年(嘉永^{かえい}二)福井県生まれ。長崎で医学を学ぶも畜産業の可能性に惹かれ、実践の場を求めて屯田兵に応募した。優れた飼育技術で明治四十年代には道内各地へ牛を供給したという。屯田開拓の失敗例とまで言われた東の屯田兵は、松浦



和田正苗
(1848~1904)

の志に導かれて牧畜へ舵^{かじ}を切り、酪農王国北海道の礎石となつてみせたのだ。その子孫が保存会副会長の松浦良夫^{よしお}さんで「先祖が苦労して築いたものを大事に後世へ伝えていきたい」と語る。

現在、和田小学校は和田中学校、幌茂^{ほろも}尻^{しり}小学校と統合されて根室市立海星^{かいせい}学校

和田屯田兵の島安太郎の屯田兵手帳。子孫の故・島治雄さんは保存会初代会長で根室市議会副議長も務め、市立海星学校校歌の作詞者でもある。地域学習の充実を願った島さんへの敬意を抱きながら、原校長はふるさと学習に取り組む。



忠順の4代目子孫にあたる松浦さん。地域でいち早くロボット搾乳を導入した。



なっている。校長の原健一^{はらけんいち}さんは歴史ある地域への誇りを持つてほしいと、ふるさと教育に力を入れる。一昨年、小学五、六年生が朗読劇「和田開拓の物語」を演じた。緊張で早口になりがちなところ、聴衆の心に届くようゆっくり読み上げ、「ひふくこ」を囁^{ささ}まずに発音するのも苦心した。子どもたちは「幕が閉まった時、感動して泣きそうになりました」「ここを開拓してくれた物語や歴史、そして和田屯田兵に感謝している。ありがとう」と感想を綴^{つづ}っている。さらに原さんは「海星ふるさと大学」という講演会も年四回開催している。屯田兵は海霧の彼方で喜んでるに違いない。



活動四十五年 北海道屯田倶楽部



市立海星学校5、6年生の時、朗読劇「和田開拓の物語」を演じたみなさんと現在の担任の先生方。右端が原さん。同校ホームページに「海星ふるさと大学」開催日程も掲載される。

北海道屯田倶楽部は一九八一年（昭和五十六）に屯田兵の偉業と開拓者精神を伝えようと屯田兵子孫によって設立された。個人会員が約百二十人。全道三十七兵村のうち十五地域の子孫会が団体会員になっている。会長の梶田博昭^{かじたひろあき}さんいわく「漫画『ゴールデンカムイ』に屯田兵が登場することから若い人の関心も高まっていて、ブームにな

っています。屯田兵は開墾のみならず、まちづくりの基礎を築きました。中隊幹部たちは、道路や灌漑^{かんがい}用の水路の造成から作物の販売戦略まで考え、現役を終えた屯田兵たちが、地域のことを自分たちで決め、自ら地域を振興していけるように、兵村会という組織も残したのです」。

屯田兵三大発明と梶田さんが呼ぶものがある。一つ目は「坊主」という米の品種。琴似屯田兵の家族が稲穂の先に毛がない品種を育てたところ、寒さに強いことがわかった。屯田兵では当初、寒冷地のため稲作は危険作物とされたが、坊主の発見は北海道が米どころとなる礎となった。二つ目は「たこ足」。旭川屯田兵の家族が考案した道具で、十六個の穴から効率的に播種ができ、大ヒット商品となった。三つ目は「唐笠馬廻^{からかさうままわ}し」。唐笠の骨組みに似た装置を馬に引かせ、人力だった脱穀の効率が飛躍した。「他にも、方言では互いに通じないので早くに標準語化したし、山形出身者が持ち込んだもんべが一気に普及したりと、屯田兵村の先進性は数え切れません。全国の文化が集まり、



外側の実線で囲まれたエリアが美唄屯田兵の開拓地。現在の函館本線と国道12号に沿って広がる。提供＝北海道屯田倶楽部

いいものをどんどん取り入れていく。これが北海道人の進取の気性につながったと考えています」。

北海道屯田倶楽部は会報のほか、研究成果や希少書を発刊している。『開拓使最初の屯田兵』は琴似屯田2世で札幌農学校卒業生の山田勝伴氏が戦時下で出版した本を複製したもの。屯田兵の積立金で銀行を設立した際のエピソードや、稲作は当局から危険作物とされながら明治15年から3年間試験栽培されたことなど貴重な史実が満載。



梶田さんは深川市に入地した納内屯田兵の子孫で、元新聞記者。海外在住の屯田兵子孫や歴史研究者からの問い合わせにも対応している。



現存する中隊本部は新琴似と野幌のみ。写真は1886年(明治19)に建設され、中隊長銃撃事件の舞台ともなった新琴似屯田兵中隊本部。●札幌市北区新琴似8条3丁目1-8 ☎011・765・3048。10:00～16:00、4月～11月の火・木・土曜開館(祝日休)、冬期休館。

美深町出身の世界的写真家・深瀬昌久(一九三四―二〇二二)も剣淵屯田兵の子孫。その生涯を描いた映画「レイブンス」で浅野忠信演じる深瀬に母親がこう語る。「屯田兵は新しい日本を作った最後のサムライなんだよ」。梶田さんは「よくぞ言ってくれた!」と声を弾ませる。

さらに「私の最大のおすすめスポットは函館本線の列車の窓から見える景色です。峰延(美唄市)から納内(深川市)まで鉄道沿線に屯田兵の開拓地がずっと続きます」と教えてくれた。

美唄市出身の北海道経済連合会会長藤井裕さんからこんな証言もいただいた。「子ども頃、祖母らは十七年兵とか、二十五年兵という地名を使っていました。屯田兵の入地年が地名になっているんです」。二十五年兵という名のバス停もあるとか。本当だろうか。

美唄市郷土史料館の学芸員・杉浦章一郎さんにうかがうと

「二十五年兵バス停があるのは本当ですよ。初代美唄市長の桜井省吾さんの回想に『昨日は砲兵に行った。明日は工兵に行こうなどと話していた』という記載も残っています。美唄は騎兵隊、砲兵隊、工兵隊という三つの特科隊からなる特別な兵村でした。馬術を専門とする騎兵隊は美唄市中心部に、大砲や火薬を扱う砲兵隊は光珠内に、道路や橋を築く工兵隊は茶志内に置かれました。炭鉱のイメージが強い美唄ですが、実は屯田兵がつくった農村がまちづくりの基盤にあるのです」。

屯田兵入地から百五十年。三十七兵村の記憶はさまざまな物語を紡ぎ続けている。霧の広野から始めた旅はつながっていく。

●美唄市郷土史料館／美唄市西2条南1丁目2-1 ☎0126-62・1110。9:00～17:00(入館は16:30まで)、月曜、年末年始休館。一般300円、小中学生70円。



写真提供＝瀬川悠